

## ドイツのクラブライフにみる「帰属意識」

### 1.はじめに(ドイツのスポーツクラブ)

ドイツにスポーツクラブができたのは1836年。港町ハンブルクのボートクラブが第1号です。体操クラブが1816年に誕生していますが、当時は体操とスポーツを区別していました。

第二次世界大戦直後は20,000の体操&スポーツクラブが存在しましたが、その後ドイツスポーツ連盟(現ドイツオリンピックスポーツ連盟)やスポーツ関連団体等の支援と、地域住民らの自発的な取り組みにより、今日約90,000のクラブが活動を続けています。

1種目だけのクラブも多くありますが、多種目、多世代によって構成される大型のクラブは歴史も長く、地域の中心的な役割を担っています。現在、国民の約28%がクラブ会員として登録しており、アクティブなクラブライフを楽しんでいます。

### 2.クラブとおつきあい

日本のように学校での運動部活動が行われていないドイツでは、子どもたちは学校から帰ってくると、近所のスポーツクラブへ。スポーツクラブが子どもにとって重要なスポーツの場そして遊びの場となっています。母親のお腹の中にいる頃から、クラブに通っている子どもも多くいます。

子どもの頃は週1,2回程度、真剣な眼差しでスポーツに打ち込み、場合によっては土曜日に地域のリーグ戦等に出かけます。もちろん、若い世代や親の世代、あるいは祖父母の世代も週1回程度、地域スポーツクラブで思い思いのスポーツを楽しみ、充実したクラブライフを満喫しています。

スポーツをしなくてもクラブハウスへ通い、仲間とお酒を飲むのもクラブライフの一つ。



クラブライフに欠かせないテラス

同じスポーツクラブに所属する家族でありながら、活動する種目が異なるのは当たり前。それぞれ違うクラブに所属する家族もあります。多くのクラブは日曜日はお休み。日曜日は家族で静かに迎えます。夏休み期間も家族で長期休暇に出かけるので、お休みのクラブが多いのもドイツらしいところです。

ドイツのスポーツクラブでは、自分の最も好きなスポーツを選び、思う存分プレーを楽しむことが大原則です。大人だろうと子どもや高齢者であろうと、自分の意思でスポーツクラブの門をたたき、1人の会員として自立した行動をとることが求められています。そうでなくてはクラブに所属し、スポーツをする意味がないと言わなければならないドイツなのです。

### 3. 積極的な参画によって培われる帰属意識

ドイツのスポーツクラブは、7人以上集まり裁判所に登記することにより「登記社団法人(e.V)」となります。この法人格を得るためには、クラブの会則に総会開催を明記しなければなりません。総会はクラブ運営の方向性や重要な事項を審議し決定する場ですが、会員自身の充実したクラブライフを担保するために、会員としての権利を主張する場でもあります。

権利はすべての会員が持っており、議論は白熱するものの、ともに楽しむ道を探りクラブが発展することを願うことで意見は一致します。良い方向に向かうために調整しながら協働関係を築くことに重点を置いており、よきスポーツマン(ウーマン)そして社会人としての言動を誇りとします。

自慢できる素晴らしいクラブを創るための最高会議に参画する権利を持つことは、クラブに入会し会費を払った者だけに与えられる権利であり、クラブのルールに従うことにより充実したクラブライフが手に入るのです。スポーツを楽しむと同時に、クラブの運営に係わることができる喜びは、クラブに対する帰属意識を無意識に高めています。

### 4. クラブ物語とシンボル

総会や日頃のクラブライフを通じて、自分の所属するクラブの理念や目標、あるいはクラブ観やスポーツとの係わり方などを共有することにより、クラブアイデンティティを創出しながら自慢のクラブとの一体感を覚えていきます。

多くの会員が、会社組織のような利害関係のないクラブ仲間との間に生まれる「同一性」に価値を見出しています。会誌や会報あるいは年長者との交流によりクラブの歴史や様々なエピソードを学び、クラブの良き伝統を誇りにします。その伝統の中に例えば祖父が登場したり近所の知人が登場することにより、自分とクラブの距離を縮めます。自分自身もその歴史を作る一人であることを感じ取ることにより、いつしかクラブ愛が芽生えます。

同じクラブの人ならば、誰とでもスポーティなおつきあいが始まり、クラブのすべてに愛着が生まれます。「スポーティなおつきあい」とは、「ルールを守り、対等で個人を尊重するお付き合い」という意味合いです。しがらみだらけで、抜き差しならぬ濃密な人間関係を築くのではなく、いつまでも飽きることはない心から信頼し合った人間関係がクラブで築かれていきます。

クラブのシンボルマークが付いたお揃いのユニフォームを着ることにより、さらに固い絆が結ばれます。一見すると濃密な人間関係が出来上がってしまい、排他的な集団になってしまいそうな気がしますが、この素晴らしいクラブに一人でも多くの人に入ってほしいと、広く門戸を開いているのがドイツのクラブです。誰にでも開かれたクラブだからこそ、法人格が認められ、地域の財産としてその価値が高く評価されているのです。



クラブ指導者と子どもたち



クラブ活動のプレゼンテーション(フェスティバルにて)

## 5. 終わりに (生涯にわたってクラブ三昧)

クラブ会員としてクラブライフを楽しむことにより、個人の自立機会が生まれると言われています。スポーツクラブにおけるスポーティなお付き合いは連帯感を一層高め、結果的には地域の活性化や発展に大きく貢献することを多くの人が認めています。

そのためにも、クラブ会員はみんな楽しく充実したクラブライフの創出に余念がありません。

対外的な試合のメンバーとして戦ったり、クラブ総会で議論したり、一緒にクラブの運営を手伝うことにより、自分のクラブライフ史をクラブに記していきます。

大人になってから指導者のライセンスを取り、自分のクラブの子どもたちの指導を行ったり、クラブハウスの建設や修理に加わるのも、その人にとっての何気ないかつ貴重な「クラブライフ」の1シーンなのです。



クラブハウスレストラン内のミニ博物館

幼い頃からクラブ仲間としてクラブライフを一緒に過ごしてきたカップルが結婚し、クラブハウスで会員の祝福を受けるシーンは、2人にとって最高の瞬間であると同時に、結びつけた「我々のクラブ」を自慢し、讃える最高の瞬間となるのです。

地域の人々がスポーツクラブに入会することによりルールで結ばれ、会員の協働によりクラブが地域に存続することになります。そこに地域との係わりを持つ居場所が創出され、多くの人に生きがいと勇気を与えることをドイツのクラブは立証しています。

また、クラブへの帰属意識の強さが、生涯にわたってスポーツを継続する力となるだけでなく、クラブライフを通じて育まれる組織文化を地域に定着させ、健康で豊かな地域社会の形成に寄与することを証明しています。

(佐藤由夫 関西国際大学人間科学部教授)